第24回 富士山写真大賞

審査員 三宅 岳 (写真家)

総評

二類から五類へ。人類の未来をも左右するかと思われた新型コロナウイルス。その位置づけが大きく変化したのが2023年。その脅威に怯え、生活ががらりと変化したこの数年を経て、ようやく普通が戻ってきたのである。

その普通の暮らしがいかに貴重なものであったかを再確認するという間もなく、大波小波のように、やってきたのはその開放感を満喫すべく、観光地を訪れる国内外の人々。山へ海へと繰り出す老若男女が一気に増えてきた。

2023年夏季の富士山登山者数は22万人以上であった。その秋にコロナ禍が発生した2019年が23万人台の登山者であったというから、ほぼコロナ以前に戻ったと言えるだろう。国内のみならず、海外からの訪問者も一気に増加して、一気に以前の活況を取り戻したというわけだ。

一方、写真を取りまく世界は、コロナによる異変から、いまだに元に戻りきれていない印象が強い。かつて、写真を識る、となれば、情報満載の写真雑誌に目を通すことで多くをカバーできたのだが、インターネットの普及で弱っていたところにコロナがトドメをさしてしまい、相次いで休刊廃刊となってしまった。各誌のコンテストも同時に消えてしまったわけであり、写真向上のための里程表がふっと消えたような寂しさが残ったままだ。

一方、写真のハードルは、スマホの普及で一気に雲散霧消してしまい、誰もがいつでもどこでも、実にお手軽に写真を写せることとなっている。それゆえにかえって表現としての写真の目指すところが、霧に包まれてしまったようなのだ。下手をすると、動画からの切り出しで写真がまかなわれて行く時代になってきているのか、と思うほどに、動く写真でさえ、誰もが気軽に撮れる時代である。

とにかく写真がどこに向かっているのか、まるで見当さえつかない時代に片足突っ込んだな、という印象である

* * *

とにかく、うろたえ続け右往左往するばかりの人間社会を、はるかに見下ろし、ただただ泰然とその姿を変えることないのが、富士の山。ただその優美を魅せるだけで、言葉にしようもない、天上天下唯一の存在として、どこまでも厳しく、そしてどこまでも穏やかな富士の山。だからこそ、富士の山と向かい合ってもらいたいのである。

流動するばかりの時代にあってこそ、レンズやカメラというからくりを使いながら、泰然と構える富士を、それぞれの富士として描き切る。切磋琢磨した結晶が、ボタン一つで簡単に消え去る画面上の写真ではなく、具体的にプリントとして表現する。

このずらりと並ぶ、結晶のごときそれぞれの富士山こそ、本大賞の見どころであり醍醐味なので

ある。

* * *

さて、今回の富士山大賞について語ってゆこう。まず参加者である。応募点数は855点と前年に引き続き4桁を切ってしまった。また応募人数233人とこれも減少している。いずれも前回である2022年度の第23回の9割弱である。けっして数が多い方がよい、という性質のものではなく、実際に写真の質が落ちているわけではないのだが、やはり減少傾向は気になるところ。ここは再び増加してくれると、選者としても嬉しいばかりだ。また、ご当地富士の応募もあったのだが、まだまだ作品としての力があると感じられるものが少なかった。ご当地富士ならではの新鮮なアングルは必ずあるはずなので、ぜひとも探求してもらいたいところだ。

* * *

では、個別作品への講評に移りたい。

金賞「霧の朝」上野祐司さん撮影

あえて極端な分け方をしてしまえば、富士山の表現方法は二つに収斂してゆく。

一つは、富士山を脇役として徹底させること。もう一つは、富士山を唯一無二の主人公そのものに仕立て上げること。その二つの道のいずれかを、中途半端にせず詰めてゆけば、富士山という強烈な個性は微塵も引き下がることなく、視線視界にその像が結ばれ残るのである。もちろん、視覚の記憶は心理の記憶にも重ねられ、富士山という絶景に昇華してゆくわけである。

さて、本作品の美しさは、正々堂々真正面からしっかりと富士山に対峙し、画面いっぱいその姿を捉えたという、基本にある。

ふっと流れはじめたばかりの霧。薄い蒼味を帯びた柔らかな光の彼方に、やはり蒼をうっすらとひいた雪化粧した富士の頂が凜とした姿を見せはじめる。左右均等に裾野を広げてゆくシンメトリーな美しさが露になってゆく。とはいえ、未だ末端は霧に溶け込んで浮遊するかの如く。その神々しいまでの瞬間を堂々と正面から撮りきっている。

手前には、すっかり葉を落とし裸となった木々が数本。まるで背比べをするようにすくっと伸びて肩を並べている。ともすれば間抜けになってしまいそうな正面の裾野に、邪気もなくすっとはまり込み、こなしているのは富士の霊峰を引き立てる的確な役どころである。

主人公と脇役。このたった二つという端正で端麗な構成が、この写真をどこまでもスマートに、そしてどこまでも深いものに仕立てているのである。

未来への希望をはらむ明るさ。そして安定感。無駄のない構図。見るものの視線を、心を、ブレさせることなく、富士山そのものに静かにゆっくりと引き込んでゆく。その絶景の内なる力強さ、潔さが、みごと金賞を引き寄せたのだ。

銀賞「彩光」滝本雄一郎さん撮影

穏やかな写真である。しかし、沈んだ写真ではなく、きらめきを残した穏やかさだ。

また、富士山の小ささも効果的だ。完全なるシルエットだが、富士山とはシルエットになっても遠くにありても、間違えることなく富士山なのである。

富士の高嶺は海と組み合わせられての作品になることがとても多い山である。こう書いたのは、一昨年度の金賞作品の講評である。その評の冒頭でとり上げたのは、葛飾北斎の代表作の一つ『神奈川沖浪裏』。その名作に見る静と動との対比と同じように、一昨年金賞作にも富士山とダイナミックな波という静と動の対比がテーマになっていた。一方、この作品は同じように海と富士山という組み合わせながら、ダイナミックな動きとは縁がない。一方で、明と暗、そしてその間を埋めるかのような色彩の鮮やかさ華やかさが際立っている写真なのである。遠く遠く優美なシルエットに姿を変えた富士山。一方、残照の名残り色、それを映しこんだ水面。柔らかさと緊張感が、一枚の写真にみごとな共存を見せている。

なお、この写真には、空間が多い。何もない空や海。こういった空間は無駄な空白になってしまうことも多いのだが、この写真では、そこにこそ諧調があり色彩がある。その美しさには、ただただ、感嘆の息を漏らしてしまうしかないではないか。

銅賞「羽田空港からのパール富士」森屋憲さん撮影

空港。夢運ぶ翼行き交う場所は、技術の粋を集めた現代ならではの港であり、去来する旅人の出会いと別れの交錯する場所でもある。その空港のなかでも、日本を代表する、たとえば、やはりメトロポリタンのハブ空港である羽田である。

この巨大な施設さえも、新型コロナウイルスの影響は大きかった。その期間、何かの折につけて報道されたのは、どこまでも減少した運行本数やぼっかりと人気のないロビーであった。空港も時代の証言者なのだ。

その彼方に、細い月を肩にした富士の山。絶妙な対比である。両者の間には静かに散らす火花すらない。人間界で起こったさざめきやどよめきなど、何も知らないよ、とばかりに揺らぐことないシルエット。今回の感染症騒ぎに限らず、古来より沸き起こる理不尽で想定外の事件事故は、時に徹底的に人間界を苦しませてきたはずなのだが、そんな時にでもこのシルエットに知らず知らず励まされた者はいたはずである。

現代を切り取る一枚の写真が、想像ドラマの扉をこじ開ける。そこで果たす富士山の役割は推して知るべし。奥深い主題の一枚といえようか。なお、蛇足ではあるが、パール富士は満月を背にした富士山を語る時に使われる言葉だが、あえてこのか細い月をパールと題したのも、悪くないと感じている

それでは6点の優秀賞について。

優秀賞「夜空のファンタジー」加藤利忠さん撮影

独立峰富士には、様々な雲が湧き、絡み合い、そして消えてゆく。富士山大賞には、毎回毎回目を見張るような雲と富士山をテーマにした写真が応募されてきて、それぞれがみな傑作ぞろいなのである。玉石混交というよりは、圧倒的に玉が多く、その熱量には圧倒されるばかり。それだけに選ぶ側の審美の目も厳しくならざるを得ない。その厳しい中をかいくぐった傑作の一枚。押し寄せる雲の群れが闇夜に白く輝く。その透き通るような美しさとコントラストの妙が優秀賞に押し上げた。

優秀賞「朝まだき」瀧しま修じさん撮影

巨樹でもなく、繁れる木でもない。湖畔にたたずむ健気な一本の細木に向けた作者の視線がまずは良い。その後ろに月を配する心配りも上々。そして左に寄せながらも堂々たる富士シルエット。突飛なところはないが、落ち着いたのがある構図。そして、何より効果的なのが、まさに朝になるかならぬかという時間帯だけの空の色。組み合わせの妙がこの一枚を彩っている。

優秀賞「燃ゆる峠」落合正和さん撮影

見事なまでの一日の幕開け。劇的な一日を予感させるような色合い。西側から望んだ富士の山だからこそ、右肩にちょこんと鎮座する宝永山のシルエットが愛らしい。その手前に右下斜めにつらなる山並み、そしてそこに湧き上がる雲。富士山を堂々と真ん中に配置したのが少し気がかりだが、黒木のシルエットが少し左側で重めに配置され、うまく左右のバランスを保っている。

優秀賞「朦朧富士」田所俊一さん撮影

見えないものも撮る。シャッターを切る深層心理だ。それが物理的であれ技術的であれ、いかなる理由でも写真になりはしないと思いき、それでも切るシャッター。なにか原始的な渴望を薄霞にむけて、いわば心眼で捉えてみる。微かにその姿を感じるだけの超遠景、解像度や画素数といった技術的な問題、そういった深い穴を知らずに踏み越えてしまった一枚。富士山には、そこまでして写したくなる魅力がある、ということの裏返しに作品に昇華した。

優秀賞「斜光」持田恭茂さん撮影

赤と黒。ともすればおどろおどろしいミステリアスな深い色合いの組み合わせだ。周辺事項を一切廃して、堂々とその二色で富士山を切り出してくる。無駄のない力強さがこの写真の骨頂である。作者は雲間からか、或いは地平からの斜めの赤光を意識している。その光は斜めから差し込むものかもしれないが、しかし撮影者の視線は真直である。山頂が深い翳りにあるというタイミングも良い。それは何かの予兆なのか。むろんそんなことは無いと思いつつも、もしかしたら、と感じさせる底力湧く写真だ。

優秀賞「ダイヤモンド富士の日」渡辺英基さん撮影

雄大無比。とてつもなく大きな存在である富士の山でさえも、客分にしてしまうその主が、まさかこんな小さな蜻蛉であろうとは。生命の礼賛。まばゆいばかりの陽射しに輝く命。富士山という最大の岳に、小さくも張り裂けんばかりの命を対比させる。小気味の良い俳句のような、大と小の比較も素晴らしい。この生まれたばかりの小さな生命体の放つ無限大のエネルギーが、昇る陽を宿した富士の頂よりも、さらにおおきな存在に輝き始める。それにしてもこれは随分良いタイミングであろうか。撮影タイミングの良さも含めて、しっかりとした撮影が伺われる一枚。さらなる上位入賞の可能性も高かった一枚だ。

以上が優秀賞までの評である。これに続く入選作は、いずれもが、あと一步で優秀賞に入れ替わる作品ばかりであった。選ばれなかった理由の一つには、優れた写真であっても、似たような写真が複数枚応募される場合がある、ということも憶えてもらいたい。

有名な撮影ポイントはいざしらず、撮影会などで、同じ場所同じアングルで撮られた写真での応募となると、どうしても、さっき見た写真として新鮮味を失ってしまうのである。

また、冒頭でもふれたが、郷土富士やおらが富士での募集、傑作が少ないのが残念であった。ぜひともご当地富士での傑作を応募いただきたい。

最後になるが、これからも油断することなく富士山と対峙し、心を込めてシャッターを切っていただきたい。選者一途に願うところである。